

開催地名：福井県敦賀市	
開催日時	令和2年2月9日（日） 13:00 ～ 15:00
開催場所	敦賀市福祉総合センター
語り部	高橋 進一 （千葉県旭市）
参加者	敦賀市地域防災連絡協議会、各自主防災会等 約 100 名
開催経緯	当市は近年、災害による大きな被害を被っていないが、集中豪雨等の影響による水害や、地震被害、また、原子力発電所の立地エリアであることから、原子力災害時における対応についても住民の関心が高い。住民に対し、防災セミナー等を通して、防災意識の向上を促していくことが必要であると考えている。
内容	（１）千葉県旭市の被害状況 旭市の広い範囲が震度５強の強震に襲われ、その後、沿岸部を大津波がくり返し襲った。地震発生からおよそ２時間半後、最大の津波が押し寄せた。災害波は堤防を越え、町を大きく飲み込んでいった。沿岸部では家屋が流出したり、押し流された車や家財道具により、がれきの山ができた。津波被害の大きさをうかがい知ることができる。 地震発生から津波の被害を受けた旭市では、多くの人たちが一時避難所に避難した。停電、断水の続く中、収まらない余震の不安と寒さに耐え、眠れない一夜を過ごした。津波以外にも地震による被害が多く発生した。道路の陥没や地割れ等も至る所で発生した。家屋は傾き、ひび割れ等の住宅被害も多数見られた。海上地域にある普門院では灯籠が倒れたり、屋根の瓦が落ちた。 今回の震災では、液状化でも大きな被害が出た。地盤が一旦、液状化したところでは、二次災害の恐れが大きいと言われている。旭市の被害状況は死者 14 名、行方不明者 2 名。住宅被害は 3,827 世帯に及んだ。住宅被害のうち床上浸水が 677 世帯、床下浸水 276 世帯、液状化 768 世帯、特に被害の多かった飯岡地域では、この他、津波による建物の倒壊等で数箇所の道路が通行不能となった。東端にある飯岡漁港にも津波が押し寄せ、漁船が転覆する等、甚大な被害をもたらした。また、文化財にも多大な被害を与えた。 （２）復興に向けて これまでにさまざまな復興プロジェクトが行われている。昨夏行なわれた『いいおか津波を学ぼう、親子防災教室』では、被災した地域を実際に見て回り、津波の恐ろしさ等を学ぶ防災教室が開かれた。また、10 月に県が実施した県民アンケート結果では、地震発生後すぐ津波が来ると思った人はわずか 22.7 パーセントであった。77.3 パーセントは地震イコール津波という認識を持っておらず、海岸近くの住民でも、すぐに高台に避難という意識が希薄だったことが分かった。一度避難してから津波が完全に収まるまでの間に自宅に帰った人は 37.1 パーセントであった。

	一セントで、家や家族が心配で車や貴重品を取りに行ったことが帰宅の主な理由であった。町にはまだ大震災の傷跡が残るが、市民の暮らしが1日でも早く戻るよう、復興に向け、町は着実に歩みを進めている。 (3) 災害を振り返って 一つ大事なことは、過去の災害から学ぶということである。過去に起こった災害について、今一度見直してみることも大切であると思う。自分の住む地域がどのような地形なのか、活断層はあるのか等、土地の特性を認識しておくことをお勧めする。 また、防災対策において重要な備蓄として、家族全員分の水の確保をお願いしたい。生活するために使う水は一人当たり1日3リットルと言われているが、量販店で売っている2リットルのペットボトルを、家族の人数分だけは準備しておいたほうが良い。 続いてお勧めしたいことは、家族で防災についての話し合いをしていただき、避難場所や携帯電話不通時の相互の連絡方法などについて確認をしておくことである。そして最も重要なことは、自分の命は自分で守るということである。命を守ることはすべてに優先する。自分が負傷したり、命を落としたら、家族や友人を誰も助けることができない。そのため、不用意に危ない行動をとらないでほしい。そして安全を確認してから、救助に向かっていただきたい。 振り返ると、私の住む旭市及び飯岡地区の津波対策、地震対策は万全ではなかったと言える。さらには、自分の家族の間でも、津波や地震に対する準備は決して万全ではなかった。心のどこかに、「大丈夫だろう」という、自分の都合の良い考えがあったことは否定できない。皆さんには、いつどこで発生するかわからない災害に対して、万全な準備と対策をお願いしたい。
開催地より	津波の恐ろしさを改めて実感できるお話だった。「大丈夫だろう」という慢心を捨て、できる準備を進めていくことの大切さを痛感した。地域防災活動の推進につなげるための一助としていきたいと強く感じている。